清猫後集 二

袋草紙巻二

高野姫
孝謙天皇諱阿閑平城宮在位十年　勝宝八宝字二

此帝御製在万葉集号阿閑皇女

同集載勝宝及宝字元年歌

月日太上天皇光明皇后主上相共幸行由見之

又世間有万葉集抄序物不知作者件序云栄

本朝臣人丸歌集云天平勝宝五年春二月

於左大臣橘卿之東家宴饗諸卿大夫等于

九曜文庫

時主人大臣問ー如此件大臣橘諸兄公
也年号又孝謙時也人九至于此時欲從天
武至天平勝宝五年八十二年也以前年相
加百歳計欲

廢帝天皇（号淡路平城宮）　諱大炊　六年宝字八（自二年戊戌至八年甲辰）但二年

孝謙治天（九）故除之

稱徳天皇（高野姫重祚平城宮）　五年（天平神護二景雲四又除景雲四欲）

光仁天皇（平城宮）　十六年（宝亀十一天應一）

宝亀三年濱成朝臣奉詔作和歌式

桓武天皇（日本根子皇統弥照尊）　諱山部　在位廿五年（延暦三十一月十一日戊申遷幸長岡京同十三年甲戌十月廿一日辛酉車駕遷于新京平安京）

平城宮長岡平安宮御宇生年卅即位廿五年

後十五年延暦廿五年丙戌三月十七日崩

七十葬山城柏原陵延暦廿三年十月幸和

泉紀伊國等（日本根子天排国高彦尊）　諱安殿　在位四年大同四年四月十一日丙

平城天皇　子天皇自春寢食不安

大同四年讓位皇太弟（安宮）嵯峨也十一月停大嘗會（同年）

造平城宮依太上皇命也十二月幸平城水
路依此百事隨太上皇之臣可配流之由宣
下此間出家〻弘仁十四年癸卯四月廿三日
停平城天太上天皇諸司天長元年甲辰
七月七日崩五十一葬大和楊梅陵帝見召文
天武以後至大同百廿八年人丸天武御時慮
從田見万葉集然者以前年暦相加減定及
百五六十歳死尤有疑
赤人又起於元正共長命之条旁難信受

如万葉集人丸始自天武至文武如家集至孝
謙赤人始自元正至聖武於以後者指證據不
見欤是一古今云　　祭良帝御歌

ちはとなるものはやこもの
いろもかはらぬはなにはなるる

又云

萩の花たにぬるとられぬるぬ
よしいもしらぬ人ハ枝なるらんよ

讀人不知

又云

ゆきの田川もこほりてなりにけり
わたるはうきなのやうになん

此歌或人云祭良帝御歌也

如古今万葉集以往人者直不冒其名後注之以之思之古里歌後祭良次歌二首以往祭良人丸同時帝也是二

難者云

一者世間祭良帝御時集ト云物有件集有此歌三首二者古今目録仲實撰以三首歌注帝ト非祭良

帝兩人儀如何

答云

古里歌載件御集之条愚昧之後輩誤冒入歟從古載三首古今豈位者冒様所同哉至仲實目録者失之哉或諸家集或在生撰云〻或後人集ト〻〻彼集若以後人冒出乎

難者云

同人歌位署冒様不同之条古今之習也有故夏歟於載冒籍無不審歌者直冒其名至傳聞巷説不悋哥者後注其名也非仲實

之失歟

各云

然也但先賢難辨分明不注叉以後輩之愚慮詳之如何若存此儀彼御集弥難為證跡

大和物語云

昔奈良ノ帝ニツカウマツリケル采女ヲ帝召テ又モ不召ケレハ心ウカリテ夜ヒソカニ出テナルナハノ池ニ身ヲナケテケリ帝キコシメシテ歌ヨミタマヒケル　人九

わきもこりねてれしをしるさハのいけのたよりもとしはかなしき

帝

市原さハ此池もたゝしれわよもこゝろ

ゆきもかよはしれよ

同帝龍田川ニ紅葉面白ヲ御覽ヒケルニ　人九

たつ田ゝハ紅葉ゝなりぬかしなれ

ゝゝゝのゝ山ゝきれゝゝ

帝

泊田川もらみそれてなほ流れ
わたしはみしきなるやなを

同帝イハテト云鷹ラウレナヒテ
イハテヲモフソイフニスレル
奈良ノ帝長谷ニオハシマスルトキ嵯峨帝坊ニ
ヲハスルニタテニツリタニフ
うらみ人のうらみ先ばふるもの
恋のうらみもとはるれば

返歌

折人のうらのよるにわたるなる
うらもふかうもとはれるわれ

次第如此今案ニ三反ハ同帝ト昏之其後
更奈良帝ト昏也各別帝ト見ハテノ蘭ノ歌
ハ無疑大同帝歌也嵯峨帝坊ノ時之故也
初メ三首者以往ノ奈良帝也人丸相伴之故
也然則兩帝之儀相叶古今之意趣是三又
采女ノ身ナクル夏大同ノ帝ノ時ナリハ此

京也而夜偷出于大和ノ猿澤池ニテ不可
行此京此無大河哉以之思之仆帝非大同
朝也是四已上理四　然則号奈良帝非一
人之趣明白也仍所存愚慮之以往奈良帝
ハ聖武天皇也多其理歟　如日本紀彼御
時述絶興廢又歌人有其数萬葉ニ多ハ載
此時歌就中天平元年二月十四日羮諸歌
之由見同記是一域書云猿澤池ニ身ナケ
タル采女アメノ帝ノ御時也云ヽ一名号

天蟹國押開豊櫻彦天皇此故ニアメノミカ
ト、云又平城宮ニ御故一名ヲ稱奈良帝
歟是二
難者云如古今目録号ス心帝天智天皇也如
何　答云仆帝一名号天命開列天皇之故
也雖然於仆帝一切不御平城宮近江大津
朝也以同号用兩帝哉以之可知歟奈良帝
御集御堂行幸後朝之御製此又東大寺歟
天同帝御願不聞是三　已上理三　難首云

如皇代記於平城天皇注ニ奈良之号有リ至
聖武無其註如何　答云如此号或註書籍
或傳世俗天智天皇俗ニ雖号ト近江帝ト不注
皇代記圓融院時人雖稱仁和帝ト又不注同
記件号見實方集ニ
萬葉集第二巻云
椋本朝臣人麿在石見国臨死時自傷作歌
一首
かもやまの石根をまくらかりふせる
こもりくのはつせの山に
さきくさの
しまのかたをかに
あをによし
なら山すぎて
いもらはいかに
あらんと
思ふらんこの
たびやまに
しきたへの
まくらもなみ
うちなびく
こやすがうへに
こやしなりぬる
椋本人麿死時妻依羅娘子作歌二首
なかくに
ねもしなば
たれかまくらを
とりあげ
ぬらん
たくなはの
しらとりの
なきしあとに
のこりたる
かみのみ
ちりぬ
ひとりぬる
山比真人　擬椋本人麿之意報歌一首
あらたまの
つきのをすぎ
ぬかなしき
ひとりぬる
わがこいなんと
たれにつけてか

今案此巻大暑時代年号之次第ヲ立ル而此歌等藤原宮御宇天皇代之次寧楽宮和銅四年并霊亀元年秋九月歌等之前ニアリ若人丸和銅以前ニ死ル歟但聖武御時見在之由慥也不可信受隨此巻時代前後有相違難為證據唯為疑所詐出也

同集第十五巻云

天平八年丙子夏六月遣使新羅国之時使人等各悲別贈答及海路之工懃旅陳思作

歌并當所誦詠古歌一百卅五首云々

多有人丸歌但不註其名所謂

七夕仰観天漢各陳所思作歌

あまのがはをとなみかねてあさなさなわたるふねのかぢをたえかも

此哥大使歌之次ニ有

夕されはたつたの山のもみちはをしからしもこそ

とりあらしなれ

是又如拾遺集人丸哥也詞書モロコシニ使ニ

ニカリケル時ヨメル云〻已上到禁紫歌也以
之思之人丸和銅以前死去之儀難指南耳
追考　遣唐使大伴宿禰作手磨記云日本大
使山城史生上道人丸副使陸奥少從五位
下至手人丸云〻件使等天平勝寶元年四
月四日進發同二年九月廿四日歸著紀伴
国云〻又人丸集ニ有入唐之由歌也若此
人丸欤但異姓欤又各詠歌之為無人丸哥
若同名人欤

一撰萬葉集或稱大同朝疑桓武時事
古今序云
カヽリケルサキノ歌ヲ合セテナン萬葉集ト
ナツケフレケルカノトキヨリコノカタトシハモヽ
トセアマリヨハトツキニナンナリニケル所謂
桓武廿四　平城四　嵯峨十四　淳和十
仁明十七　文徳八　清和十八　陽成八
光孝三　宇多十　醍醐八昌泰三年延喜年今年也
案之計之法多ハ聖始テ集今而既有十七

之字相當桓武歟是一大同朝即位之間紀
四年宛如電光仙院之後又有夏不安穏豈
有撰集之興哉是ニ
貞観御時万葉集ハイツトニエラハレタルソ
ト、ハレケレハヨメルハ　文屋有季
神なつきたちかはなのしたもえ
をのこやたのふるとうれ
案之大同帝ハ平安宮御幸也於此京撰ル
集ヲ奈良ノミヤコノフルコト、イハムコレ如何

是三　已上理三

難者云如古今真名序ハ平城天子詔侍臣
撰萬葉ト書如何　答云此平城天子ハ桓
武君ハ聖武等也更非大同之朝如古今序
ハ時歴十代数過百年云〻然者當桓武而
多其疑
一ハ彼集ニ寶字三年以後之年号不載　一ハ
家持延暦二年任中納言者也而公卿之時
寄不載就中桓武寄之由無所見予案之

聖武之撰歟多其理一三如古今序人丸同時
奈良御時被撰之由見一三天平元年正月十
四日奏諸寄之由見皇代記一八能令作寄云
至十代文八以若過若減皆存大數之儀上
餘取十代歟
考物云猶聖武撰也古今序十代百年文選序
摸昔之歟件序云時更七代數逾千祀云然而實
七代不過云又千歌巻書千九百九十首也人丸
既没和歌不在斯是文選文王雖沒得在此乎摸也

右管見之所及粗勘録之抑如昔籍者人磨
者聖武之臣萬葉者同帝之撰孔於大同之
議者指證據不見者也但纔守一隅之士難
決万代之疑恐以勘文勿爲指南矣以勘
仁平三年月日前和寄得業生山邉宿祢工
家持所歴官位
天平　年任内舍人十七年正月從五下
十八年丙戌三月少輔六月越中守十一年
四月從五上天平勝宝六年甲午四月兵部

少輔十一月爲山陰道使天平寶字二年
六月自幡守六年正月兵部大輔八年正月
薩摩守神護景雲元年八月大宰大貳四年
六月民部大輔九月中辨中務大輔宝亀元
年十月正五位下三年二月式部權大輔五
年三月相摸守九月右京大夫六年十一月
左衛門督七年三月伊勢守八年正月從四
位上九年正月正四位下十一年二月參議
九月右大辨天應元年四月春宮大夫六月

左大辨 大夫如元 十一月十三日從三位延曆
元年閏正月坐氷上川縋及夏先移京外四
月有詔宥罪復參議春宮大夫同六月以
本官出爲陸奥出羽按察使鎮守府將軍在
任不幾七月十九日任中納言 大夫如元 三年二
月任持節征東將軍四年八月薨于余日其
屍未葬大伴縋人竹良等改中納言藤原川
縋夏發覚下獄掠驗之事連家持由是避除
名

古今集　和哥千九十九首　幷中長歌五首

延喜五年四月十八日令友則貫之躬恒忠峯等撰之云〻撰和哥所内御書所也　幷集宣下并叅覧之年月不審如假名序延喜五年四月十八日仰其〻等不入萬葉集哥令奉古新云〻幷日之宣下欤如真名序延喜五年四月十五日（本十八日僻事歟）臣貫之等謹序云〻如幷幷日叅覧欤云〻真名序或説ニハ假名序ヲ感歎シテ淑望竊摸之真名云〻或説ニハ爲昏假名序先令淑望昏ニ上代之草也云〻予案之件序實ハ紀家筆云〻淑望竊摸之儀相遠也非大夏何可假嚴閣之筆哉上代之儀ナラハ件序摸假名筆之計也就中奇仙之得失ヲ註之条似貫之所爲重案之貫之力先以假名昏上代令昏真名序欤而假名序流布之条有疑基俊本ニソ初ニ昏真名序與ニ假名序ヲ昏ニ侍シ若有所存欤又陽明門院御本（延喜御本云〻）

無序若可有序否之議ニテ兩様雖書序道
ニ上奏本ニ不載序欲而後日各加之欲但
仲實之撰如目録後日令上奏也而延喜七
年大井行幸歌合歌二首在此集件歌等諸
本ニ無相違猶以不審
柳貫之集云延喜御時ヤヽトウタヘル人ヽ
ヲメシテ昔今奇ヲ令テ奉兼香殿ノ東ナル
所ニテ令撰給初日ノ夜暮ニテトカノイフ
間ニ御前ノ梅木ニ郭公ノ鳴ヲ四月六日

ナレハメツラシカリタヽヒテ呂出テ歌令讀
給ニ奉ル歌
ほとゝきすいつくなきにてなくらんおよ
そのくれはあやしきハなし
是雖無年号叶四月十八日之儀但六日ハ
昏写之失欲十八日ト六日之字ト相似可
誤奥魯章章之誤是也一證也方ヽ難決斷
ヲ予談會顕廣或人之次以問此支答
先年相尋基俊君之處答云延喜五年四月

十八日上奏日也序ハ貫之以假名書土代
令淑望筆者也而共依有興不棄假名序又
上奏以後哥入之条貫之不堪優美追入之
也仍奏覧本ニハ無件哥等云〻予重問云會
釋尤可然但不審有二一者上奏本之流自
世間不見何可然次ニ不堪優美追入秀
哥ハ同亭子院哥合貫之カ櫻散哥可入之
答云件哥ハ古今集ニ兼均法師櫻散花ノ
所ハ春ナカラト云哥ニ同意也仍不可入

之欤今予重云此儀ナラハ新撰集ニ入件兩
哥之条如何答云於件条不及カ云〻新撰
集貫之一人ニテ撰玄中之玄也而不入古
今哥ヲ多以入之貫之カ意ニ存秀逸之由
欤然者件哥等追可入之此儀猶以難指南欤
追案此叀猶基俊義宜欤能曰家集序云如彼
天磨以往三代之明主降勅恢茲道四人哥仙
奉詔獻家集是以王道股肱之臣訪於衆心揀詞
儒林河漢之才以刋卷首而題序云〻如此

用真名序歟然者又上奏日四月十八日之
由顕然也又撰後哥出入事非無例後中宮
壬月哥ヨミフレハ雖入金玉集宮薨去後納言出
之云ヽ撰集之習歟但宣旨ノ集私進止如
何櫻散ノ哥ヲ不追入自哥之故歟
古今證本陽明門院御本貫之自筆是延喜
御本相傳也後顕綱朝臣申賜其後轉〻
於故公信朝臣許燒失之歟本無序也小野
皇太后宮御本貫之自筆假名序也於宮燒失之以件

本之流通家朝臣自筆本是也其由被昏表
紙
花薗左府御本貫之妹自筆假名序是閑院贈太政
大臣本轉来云ヽ所令進新院也其後不書
是等本皆無相違異普通本歟此集萬葉集
歌少〻載又家持猿丸太夫集歌多以入之
稱讀人不知又大江佐国藤原仲實等各取
目録而仲實目録有訛謬歟彼集号祭良帝
聖武御製也乍三首注大同朝御製於一首

古里ト成ニシ　大同トモ可疑至龍田川歌人丸
奈良ノ都ニモ
已進和定聖武御製也人丸死去哥載萬葉
隨年代玄隔不可遇大同朝古今ニモ二首
八哥之後ニ註其名古里哥ハ先註其名似分別
後撰集和歌　千三百九十六首
天暦五年十月日詔坂上望城源順紀時文
大中臣能宣清原元輔等於昭陽舍令讀解
万葉集之次令撰之号梨壺五人ト也　一条摂政為藏
人少將之時勘所之別當有奉行文千時有

平兼盛而不入此中不審云〻此集未定ニテ
止之云〻仍本無四度計但證本ハ宋雀院
塗籠本又青表紙云〻是ハ範永本也　依国取用
録不審有〻〻就中以兼盛哥稱兼賢王哥
即
ふるゝハ萩のやけこすかゝるとて
わの乳ぢ〻とかれをゆくらん
又云
あをやまあれのたゝりかあらし

ちいしきことのよのうつりゆく

前哥ハ大和物語ニ兼盛哥トテアリ後哥ハ
在彼家集而此集ニ或本ニハ兼盛或本ニハ
兼覧大君トハ書是和謙之人直欤凡昏ノ
僻事ハ荒涼ニ不可直云〻兼盛ハ本ハ以テ
源氏為大君而天暦曰之帰本姓云〻爵叙
云〻凡兼盛家集哥多入此集而或有讀人
不知尤不審
所謂

きこえあのたにかぜふく
山ふかしなきぬ雪のかなしさハ　又云
わすふらはちりなすもたつの　又云
なるハかりときハのあのおりわ　又云
あのきんぐらはいきやゐ
ををの人見まれなほ山ちとよ
是等類也
凡如此事撰集癖欤
拾遺抄ニハ中務歌うゑしすのかなりをは雪はらめ

輔親卿アレヒキノヤニホトヽキスナトナレテ
於有讀人不知旨是無疑作哥也越度欤近
代集ニモ多有之又 拾集有不審戀部第三
業平歌ヲ
よひのまにちやなくなくいくのくし
ふわるこゝもうちちふいく
返夏
わくらゝとあきはきるこゝろいまはたゝ
ちくいむ神やたよ海なな

拾哥ノ詞如伊勢集カクテミヤストコロナヤ
ニセタニヒケレハアツニリテ候ニ紀伊藏人ト
イフテコノハシメノヨトコアカラサヽニシモニ
オリヨ物イハントイハセタレハカヘリコトニコヽ
ロヲシハシナクサメテトイフ古夏ノハシヲ
ナムイヒタリケルトヽ云ヽ予案之拾集始男トイフ
ハ如集ハ仲平也御息所ハ七条后也若仲
平ヲ哥誤歟但後撰之時仲平大臣也歟不
旨哥名和讃之人所為又業平元慶四年卒

云〻七条后仁和四年十月六日入内如此
時代相遠九業平會合伊勢変有疑
伊勢集伊勢物語有一首
大よとの松ハ千くさもはらなくよ
うゝてゝしもかつはなしかし
又業平集哥有三首皆後撰哥也所謂
いせのあうゝうふあよらもなわう
たのゆんはゝあくてゝゝあはたわに
よいのまにはやなくはゝよ

是等也但此哥等無伊勢物語業平集并後撰之失欲又タノメツヽノ哥ハ在古今集躬恒哥云〻

又有增基法師云物而註菴主〻ハ玄玄集
二入者也永延以後人欲付中件哥カミナツキシクレハカリヲ
ミニツヘテ　無菴主日記尤不審彼後撰ノ作
者ノ增基ハ若大和物語ニ侍增基君欲件
人ハ殿上法師ナリト云〻

拾遺集和哥　千三百五十一首

同初和哥　五百八十或四六首

花山院勅撰云〻

此集中ニ源順和万葉集哥ト云物アリ或

万葉ノ古語ヲ飜和ニナセルナリ云〻或ハ万

葉哥ヲ爲本哥ト詠スル返哥ヲ也予案之返哥之儀

欤一ハ藤經衡和後撰哥ト云物アリ後撰

中ニ優ナル哥ヲ百首計肴キ出其返哥ヲ詠スル也以テ

之思之彼順カ所爲ヲ摸スル欤一ハ万葉集ニ

是ヲ和タルトミユル哥ナレ是ヲ返タルト見ル哥ハ

間〻アリ

所謂　順カ和万葉集ニ云

いつもとも心のうちにさそはれぬ月ハ

さはなりわよもすがらとぞ思ふ

万葉ニ云

ぬきりのほのよあれらし人ゆへ

いのらしぬ〻ゝ為わふれ

ちはしなんはなきんいろふこの

たゆんこゝ人ハ尺よくほしられ

順哥云

いなわぬはやこよは月のこゝへゆらば
ちりしよとのかあハよはらし

万葉云

たゝ雪れのこすのよとおもひなるまく
尺はふこゝしなよゆたくあかも
塩かみあきよたは月乃うたろへハ
心れハやよゝちれしろよ也

順哥云

なこゝ川このゝくたとなわて、
ちれしよせゝよなのれゝすれ

万葉云

わきもこゝ袖ををゝふこゝろへの
独ひつまくよなきし物ほゆ
心日ゝくねはハなくゝもいちしふく
人ゝ所へくなゆすれ爪

是等ノ類也追動順和尋宋所見也

本奇
あらしふかなゆうくのゝこにうちぬるゝ
うゝしらくゝ秋ゝなかめかな

和
なかるゝ川うこれくゝとなかめて、
ちりしきさせゝうなれうすれ

本奇
いなりわかやらのれよすわいれはは
洞のゆうよかけうくくん

和
ゆるはかやとるはほのくくけらゝ
こゝしよとのうあゝまゝらし

件奇等経衡カ和後撰奇ト屑ヽセタリ又本

奇等非万葉歌少以有不審但於和奇者無相違為之如何

此集不避新撰集歌　又有月録　伍国撰有共錯輔尹註伍忠トワレヒトリコレノヤニ御堂御屏風奇也作者稱輔尹ト随在家集又伍忠ハ天暦御時人也伍国雖廣才者暗和奇道故欲後拾遺抄和奇

通俊卿一人撰之如序兼保之比奉之應徳三年九月十六日奏之其間及十有年奏覧

之件本寄令伊房卿清眉之處件人寄唯入
一首之故腰立不眉之仍令若狭国案澄源
眉写之〻〻證本号黒本焼表紙之故〻〻
扶持者澄源并伍国等也于時有経経信匡
房者此道之義才先達也不奉之如何但或
人云私撰之後ニ取御氣色〻〻于時有難
後拾遺ト云物世以稱経信之所為通俊見
之〻〻先以件集内〻令見合彼卿之處神
妙之由侍而後日有此難更不誤〻〻此集

流布之後更被直之由見目録序又如序古今
後撰之作者寄〻不入之兼盛寄入之是後
撰作者也但非失錯欲彼人拾遺集以後猶
存生者也仍秀寄多之故竊入之欲
此集拾遺集并玄玄集寄等〻〻載之失錯
欲有目録即礼部之撰也

金葉集和寄　六百五十四首　此外連寄十六首但流布本是也

白川院御譲位之末俊頼朝臣一人奉
院宣撰之天治元年月日奉之大治元年

之間上奏之紙集本不定也奏覽之處兩度
返却第三度之度以中昏草案先覽之而件
本無尤右納畢仍撰者許ニ無紙本ニ〻件
本在故待賢門院而今前大相国申出昏写
之無餘所ニ〻件本兼盛能宣寄并玄〻集
拾遺集寄等入之拾遺八柄ニ成テ稱弃置之由
入之也家前寄貫之カ吉野山峯ノ白雪何消テ
ノ寄也世間ニ流布本八第二度本也近代人寄等
也家前故將作打靡寄也奏覽本造紙ニ〻自筆

書之云〻時有基俊者兼和漢尤便撰者雖然
不奉之若為御不請之者故欤

詞花集之和歌　四百九首

新院御讓位之後故右京一人撰之天養元
年六月二日奉之奏覽之御覽之後返給御
製少少并藤範綱頼保同盛經等寄被除予
為御使持参彼亭奏覽本八布目色紙草紙
自筆也金葉集付流布本第三度本寄不除
之件本無知人之故也

宣下狀云

被院宣云自中古以來不入勅撰集之外和哥等宜被撰集者仍執達如件敎長謹言

六月二日　　參議敎長奉

謹上　左京大夫殿

抑超祖又并嚴閤被奉撰集希有歟也此集爲躰及末代無哥仙隨金葉撰以後年序不幾爲之如何　予于時不快而令奉　此集之後有恩免是爲扶持歟而詔問歟所存被陳其後有不請之氣一切不令見合給參覽之聊有仰下歟爲御使持參彼集之間伺見之處古哥有其數乍恐申其由其時被除之不見合給之条世以爲不歟耳

伊勢物語　和哥二百五十首但本〻不當

業平朝臣所爲也偏非彼人作哥耳古今之間哥有興之骨載歟又不論自他隨便同人哥樣骨列之若是蜜夏ヲ令混之故歟万葉集多入之又其名目有二義有蜜夏之故爲

稱僻夏之由号伊勢物語談二伊勢ハ僻ト
云故也一齋宮夏ヲ爲詮故号伊勢是正義
欽泉式部本以齋宮夏寂先冐
大和物語　和哥二百七十首　世中連哥三首但本ノ不同
作者不審先朱雀院御時天暦始夏欽先帝ハ
延喜御宇也大キオホイモウチキミト号ハ
貞信公也有兼盛并檜垣嫗等哥也又其名
目和語之由欽有古今集哥等ノ
六帖　和哥四千六百九十六首　世中長哥九首旋頭哥十七首但本ノ不定也

貫之女子所爲之故号紀家六帖兼盛重之
等哥載之
撰集之後又集出来夏流例也古今集之後
貫之一人奉之撰新撰集是云ノ中云三百
六十首ニ云ノ古今集之外哥多入之于茲知
古今偏非貫之一人之進止欽件集未撰終
間延喜八年正月任土佐守即赴任兼平五
年上洛之時延喜崩御云ノ件序云ノ貫之
俟罷版日將以工献橋山晩松愁雲之影已

結湘濵秋竹悲風之壹忽幽傳勅之納言亦
已薨逝云々此納言如補任若兼輔卿欤
後撰未定一云々
拾遺集之後有拾集中妙詞欤是又勅撰也
後拾遺有續新撰編集中哥也一人撰集尤
有其理
金葉集之後良玉集出来顕仲入道撰之同
除彼集
詞花集之後拾遺古今出来教長入道撰之

同除彼集哥予按之撰集無私夏難且譏者
不實夏也何次必如此撰玄々欤傍人之所
為別夏也
撰集秀哥漏常夏也悪哥入又不可勝計欤
貫之櫻散哥不入古今并後撰而四条大納
言為賢之第一秀哥但梨壷五人誤哉如何
後拾遺究竟哥三首漏所謂堀川右府哥
そなはらぬよもぎうのねんぶつ
ぬしのあらしもうふく

隆経朝臣哥

引物のかれすゝきほにいでしはゝ
風のしらけのかけまさるらん

兼方朝臣

たゝよこもかまくらにまよひ
まれまれ初もいはぬはちかし

是也　又金葉集三首漏所謂　江帥哥

こほりわし志かれはよりちらけて
ゆくなこよすふまくらふく

故將作哥

秋ふかいはの望こゝ山のはくなれや
ふれいつもともあふ人もなし

師俊卿哥

もりまらやすまよ風の板ゐ所
月もまいくやおそらなるらん

此哥ハ播磨千ノニクハリニカタト改テ入ヨト
被申ケルヲ作者不可入云〻仍不入之
予按カタハ充神妙タヽシ千ニテモ不可

除之相互ニハキ支也
拾遺撰之時公任卿千九モミチハヲキヌ人ソ
ナキト云哥ヲハ花山院モミチノニレキヽ
又人ソナキト直テ可入之由有御定不可然
之由被申ケレハ如本ニテコソ被入タリシ近代
之人諸支如此又凡哥善悪昔ヨリ難辨支
也シカレハ四条大納言様〻書ヲ撰ルニ以或
哥ハ入之以或哥不入彼就中自作ハ善悪
尤モ難弁支也工手モ然歟俊頼朝臣吾詠哥
中稱秀哥ト和哥ハ首計ヲ書出其中不ル耳心
哥多入之秀哥又多不入之文時三位ハ菊
是草中仙ト云題之時存不作得之由蒙衣
代所保胤未云今度御作如何各力不及不
得度也云〻而草案ヲ見蓬莱洞月照霜中ヲ
有此句保胤云已秀句作不得之由如何仍
用此句世以稱秀逸云
一諸集人名不審
萬葉集

万一 明日香河原御宇 皇極也 万一 泊瀬朝倉宮 雄略天皇

同 高市岡本御宇 舒明天皇 同 近江大津御宇 号二天智天皇一又

号二中大兄王一万一中大兄 近江宮御宇天皇

同 明日香清御原御宇 天武天皇 同 後岡本御宇 齊命天王 皇極重祚也

同 藤原御宇 持統天王 万廿 先太上天皇 日本根子高瑞男清足姫天皇也

万一大宝元年紀伊国辛亥 持統天皇大化三年 太上天皇 譲位於輕皇太子二 藤原夫人 明日香清御原御宇天皇之夫人 字曰二大原大刀自一 新田郡皇子母

万一 輕皇子 文武天皇也

万一 阿閉皇女 元明天皇也 万五注二アリ 門部王 後賜姓大原真人氏也

高安王 後賜姓大原真人氏也 春日王 志貴皇子之子 母曰二多親皇女一也

境部王 穂積親王子 桜井王 志貴親王子

海上女王 志貴皇子之女 酒人女王 穂積皇子之孫女也

以玄紬女王 六人部王之女 母曰二中戒皇女一 万八 高田女王 高安之女

万八二歌注アリ 賀茂女王 長屋王女母曰二阿陪朝臣一也 廣河女 穂積皇子之孫女 上道王之女也

尼大臣諸兄 余明軍 大納言卿之資人或人云万葉三自明ト云八二ロアキトヨムトヲ而件名不見者是人欠 藤原朝臣八束 或昼云八束改名後真楯ト云ヘリ房前第三子也

石河朝臣廣成 後賜姓高向朝臣氏也

大伴宿祢祭麿 佐保大納言第二子也

丹比真人乙麿 戸主真人第三子

野氏宿祢麿　万五梅花哥廿二首作者中大令史野氏宿祢麿　天平二年正月ノ宴也

田氏肥人　同五梅花哥廿二首哥作者中小令史田氏肥人

礒氏乗麿　同所陪陽師礒氏法麿乗法通欽

椹氏鉢麿　同大隅目椹氏鉢麿

志氏大道　同所管師志氏大道

村氏彼方　同壹岐目村氏彼方

小野氏淡理

弁基　春日藏首老　大伴佐保大宅之納言ノ法師名也

沙弥満誓　造筑紫観音寺別當俗姓笠朝臣麻呂官也

石河女郎　字曰大名兒

筑紫娘女　字曰兒嶋

大伴郎女　今城王之母也件王彼賜姓大原真人　万九上総国大極正六位上大原真人今城王ノ　万四大伴郎女和哥四首右郎女者佐保大納言卿之女也初嫁一品穂積皇子被寵無儔而皇子薨之後時藤原麿大夫娉之所

万八

雪郎女坂上仍族氏号曰坂上郎女也

紀女郎　名小鹿也庶人大夫之女大責王妻

田村大嬢　右大弁大伴祭麿卿女也　号里名ト右田村大嬢並是右大弁大伴宿祢麿卿之女也卿居田村里号曰田村大嬢但妹坂上大嬢者母居坂上里仍曰坂上大嬢于嫁諸向以哥贈答

坂上大嬢　右大弁大伴祭麿卿之女也　号里名ト

康棟　第七巻ニ三首哥ノ中以康棟号月草ト

古今集

源宗于　源忠　源實　平中興

已上傳師説夏許注之

宮道潔興　藤勝臣　難波万男

菅野忠臣　下野雄宗　式部大輔範永ハ古伝ニ女子名也メアラレト云如何

寵　或記テウ女房名也

小野小町　如壮衰秋傳者其姓玉造氏也小野ハ居住所名欤且或人云伴傳弘法大師所作云小町ハ貞観之比人也彼壮衰伝人欤

後撰集

敦實親王　源廣明　源等　源俊

源宗城　藤時而　源善　藤雅正

藤清正　源濂　源浮　藤守正

源頼　宇多女五宮号宮鬘　小野遠興

拾遺抄

藤長能　平公城　藤信旨　藤惟成

源旨城　藤国義仲文本名欤見家集　藤輔尹

後拾遺

藤義忠　大江公資　坂上望城　藤繞理

藤惟規　菅原為言　藤義孝伊勢　橘資成

坂上定成　藤隆資　藤尚忠　藤孝善

凉　橘為義

涼ハ女房名也通俊卿自歎云古今集ノ女
寵向後人定訓ニ逐テ唯稱涼歟云々

一雑談

後拾遺ハ末代規模集也雖然彼特ハ有種
種誹謗云々先序列様々次頼綱哥無指夏
多入之々々予按之不當也件人哥四首也
皆以深肝膽是尊耳早目之誤歟又号小集
集
兼方恭彼卿亭花コソノ哥ヲ入撰集申請礼

部云コソト云字不快也云々兼方起座於侍
中云社殿ハヤムコトナキ人ト思奉ニ物不覚
給人ニコソ四条大納言ノ第一ノ秀哥ニ花
コソヤトノアルニナリケレトイフ哥ハ不知給ハ
ヤトテ退出云々仍付社名住吉神主国基哥
多入之由故云々
又雑後拾遺ト云物アリ世以稱經信卿之
所為而近年俊頼朝臣ノ息子僧俊恵相語
云吉妹女房逝去之後彼遺物ヲ開見之處

故頭遺草少〻其中有件雖後拾遺之草案
故頭之手跡也若彼所為欤云〻予按之名
以帥口狀執筆之間草欤　金葉集之時有
種〻異名其中臂突アル〻第一名云〻是李
部五品盛經之所付也　撰集ノ私音ヨリ
有夏欤四条大納言中眉王御音ヨミフレハモノオモフトシモ
存日入於金玉集大王沒後除之可恠之ヲ
詞花集之時如此名不聞欤但詞花ノ詞字
音渡死音有禁忌之由或人申餘ノ難欤

金葉名予心中ニ頗思其故ハ自同見之處
佛欲入涅槃之時先世間ニ金葉花而云〻
以之思之金葉ノ世間ニ流布不吉欤而此
集之後無程白河院崩御撰者又逝去
嶋守遠高云古今後撰拾遺等ヲ号三代集
拾遺ハ花山院御撰也而花山院以往之大
嵗會ノ御調度ニ有三代集ノ御手筥如何
予云不知此夏充有興件夏如何嶋守答云
秘夏也以往ハ相加万葉集号三代集而拾遺

出来之後棄万葉用拾遺云〻

哥合事

或物云宇治殿下被仰云齊宮女御哥合左右哥忠見一人讀之云〻予見彼家集實也

九科右科共二讀之又同女御天暦十年哥合（号二麗景殿女御哥合）左哥八兼盛右哥中務各一人讀之云〻

攸講哥合時相模所詠云

ちらすなはらいよしのゝらくらいふ

此哥論出之時殿中鼓動及郭外云〻

江記云俊恵曰先年上御門右府大納言時哥合棟仲為論師而有露被畏之由哥敵方難之棟仲當坐稱右万葉集讀宜證哥一首云〻右府後日被感曰當座讀宜哥之旨雖似據對至虚言者無便哉也云〻

都芳門院根合時江記云右中弁師頼曰凡張守許孝善来向所国基（住吉神主哥赤見之前破部四人壱吾）

奇之田甲請所入云〻

之匡房卿云石大弁通俊奇手者不可被恐

先年昏狀今猶有之其昏云和奇之道雖能

宣忠峯不可恐之於貴殿者深所恐申也者

件昏狀為明鏡何可忘彼昏哉俊兼聞之大

咲〻〻件奇合尤方人以中納言中將今道殿下

為言口元心云〻隨殿下頻令制止給少年

之人不知和奇案内何為殿上人〻言口哉

就中累葉風元此例云〻 已上見江記

和奇者人ノ心〻也定頼卿問四条大納言

云式部赤染何勝奇讀侯哉 答云非一口

之論式部ハコヤトモ人ノイフ〈キニトイフ奇

ヨム者也云〻定頼云式部奇ニハハルカニテラ

セ山ノハノ月ヲコソ世以稱秀奇之如何答

不知案内也クラキヨリクラキミチハ経文也

イカテオモヒヨリケムトモ不可思ノハル

カニテテセハ彼ニ被引テ云来レル詞也コヤト

モ人ヲトイヒヲキテ示ニヒニコソナケントヨ

ム八九夫ノ可キ思寄ル事ニ非スト云フ而江記云
良暹云式部赤染共以テ寄仙也但赤染鷹司
殿御屏風寄十二首中十首ハ秀寄又賀陽
院寄合時多クハ秀寄如屏風ハ式部不可及彼
人ニ云フ　予案之仰可信大納言之説何付
良暹之儀哉但誠ニモ如キ寄合ハ赤染恒寄讀
也又式部寄不入度ノ寄合所謂花山院ニ
長元等也
但長元寄合時有中宮亮為善権亮兼房大

進義通藏人橘季通源頼家平経章此輩寄
不入云フ
同六年白河院子日二義忠則長等為主人
範永頼家ハ為役人但頼家六位時也範永
不入之如何古ハ能被執事次近代豈然乎
兼暦寄合時俊頼殿上人基俊国基輔弘周
坊内侍伯母等寄不入之又通宗ハ依為寄
仙此度聴昇殿不入之後番繞一首入之
根合時示彼如此経信顕綱等寄不入之経

信卿云凡不讀今度哥云〻
古今集之時有公忠并祭主頼基等不入之
雖然未代被知名叓倍於入筆頼基ハ後撰
ニ又不入之綷拾遺抄ニ一首也少不堪歟
ヒトフレニチヨヲコメタルツエナレハ　異本書入之一
ソノトモツキレキミカヨハヒハ
後拾遺時有俊頼基俊不入之金葉集之時
大判叓明兼不入テ腹立俊頼朝臣許ニ来
云不入今度集不可歎遺恨貴殿遇後拾遺
之時而不入之給カトモ今日ハ奉撰集給明

兼モ後集ニ罷入叓モ候ナントヽ云〻其後詞花
集持一首入云〻遂宿執了件人姓ハ中原也
而撰集之度迄本姓坂上是則苗裔之故尊
其姓也有興之　三ヲ金葉詞花兩度之撰逢
千歳一遇空過之遺恨第一也初ハ幼少後
ハ撰集者之子息之寄無入之例云〻大愁
也曽祖父隆経朝臣後拾遺作者將作又入
之故尤京金葉集作者四代之箕裘至ニ三カ之
時闕之遺恨云〻

素意ハ紀伊守重經也号紀伊入道此一宮
紀伊　夫也騎馬ニテ　楠葉ノ御牧ノ政所
前ヘ過ニ下人出来答之云無止支御牧ヲ
不下馬テ過ハ何物ソ入道云紀伊入道素
意後拾遺ノ作者ニハアラスヤト云フ下人
無答シテ令過之云フ
右衛門尉存善ハ号青衛門色青キ之故也ウ
有鳴呼氣之人平緒之時ハヲノレハ撰集ノ
作者也如此不可申云フ

古今優稱夏狩　從昔執道ハ有興夏也長
能於花山院詠三月盡哥云
ちるをしらくもかくれなきはるのつきかなしいのかといつよりふのくれぬらん
此哥奇讃時四条大納言春ハ卅日ヤハアルトテ
長能此後痛此夏テ伏病聞万死一生之由
テ彼納言必使訪之返夏云畏入了此病非
別言先日春ハ卅日ヤハ有ト仰候シ心ウク思
給テ歎之間不食ニ成テ已今明為罷云フ

其後遂ニ以テ死去スル大納言大ニ被歎思ヒ云フ執人ノ
夏荒涼ニ不可ル難キ歟
以テ言ヒ詩ニ云ク文峯按ス書ヲ白駒景詞海艤船ノ紅葉ノ
色是レ以テ言ヒ與齊名被試之ヲ日所作也本ハ駒
過ル景葉落ル色ト作ル云フ而ル先覧ル後中書王ニ之
處被仰ニ白字要ル由ヲ仍テ改作ト云フ齊名以テ爲ル怨ト
稱ル曰ク示ス予懸行ヲ予何計ル云フ齊名臨終ニ被訪
御報ニ云ク恩問ル旨恐ル悚千廻タリ但シ白字夏不ニ忘却
云フ是見タリ江記ニ

帥大納言家後ニ喚ニ俊頼ヲ竊ニ云ク在ル古今ニ松秋
風フクカラニトイフ哥任ル大臣ニ大饗セム日吾
所詠ノヲキツ風ノ哥中門ノ内ニ入テ史生ノ饗
ニ着哉如何ヲ云フ俊頼答ヘ云ク此仰如何彼御
哥ハ全不可ル劣者也雖ル依ル爲ニ古今ニ哥有ル限
先任大臣ニ假ハン公ニ御作ハ一大納言ニ三
爲ニ尊者ニ南階ヨリ縛ル昇テ對座ニ居ナント
コソ存ル假ヘト云フ帥答云ハサモアリナンヤ
如何カアルヘカラントテ有ル感氣云フ

源頼實ハ無術執道ニテ参詣住吉ニテ秀哥
一首念詠テ可ル召命ヲ之由祈禱云〻其後於
西宮ニテ
このもしたはやらはきいわくゝ
ちるもすふよししくれをぬよし
ト云哥ハ讃也當座不驚ヲ之其後又参詣住
吉ニ同祈禱夢ニ示ノ云秀哥ハ讃メリ非ス彼落葉哥
哉云〻其後秀逸之由謳哥セリ又其身ニ位之
時夭亡スト云〻

天徳哥合之時兼盛正ニ衣冠参陣テ終日伺
候
シノフレト色ニ出ニケリ我戀ハトイフ哥勝畢
ヌトキヽテ拜舞テ退出ス自余ノ勝負ヲハ不執セ
云〻
長元哥合ノ日能因キヌカフリニテ竊入テ聞
之戀哥ニ
くるゝあいろしかゝらぬすらく
ゆきもなき人の袖うおもひぬふ

トイフ哥ヲ讀タリト思テ勝負ヲ聞ニ称入也
而歟方ヨリ
あふまくとせめていのちみおしからぬ
ちはしらぬ人のいとおしらなわにも
トイフ哥ヲ誦出ヲ聞テ竊退出云フ非歟之
由ヲ存歟
道雅三位ハ帥大臣殿息也八条ノ山莊ノ
障子ノ繪ニ哥合ニ撰テ令書作者兼房家經
範永經衡頼家等也經衡為後生ニ難入之

由ヲ存不入甚以遺恨人工鬲也何ニ夏之右
哉家主ニ欲献名籍テ撰和哥之日懐名籍
シテ恭向於寢殿ニテ家經ト撰之經衡竊ニ
寄テ聞之ニ家主云秀哥何ヲ可入哉家經
云無ク尤右ワレヨリサキニ人コサリケリト云
是經衡哥也聞之不取出名籍ニテ竊飯ヲ
云フ執道有興夏也